

皆さま、こんにちは。
府中教会、アンドレアです。

本日の典礼には、「喜び」という言葉が繰り返されます。特に「入祭唱」と「第二朗読」がそうです。まず「入祭唱」は、パウロの『フィリッピの信徒への手紙』から、「主にあっていつも喜べ。重ねて言う、喜べ。主が近づいている」、と引用しています。では、「主が近づいている」ことが どうして喜びなのでしょう。第一朗読で預言者イザヤは、来られる方は、「貧しい人に良い知らせを伝え」、「打ち砕かれた心を包み、捕らわれた人には自由を、つながれている人には解放を告知されるからです」と答えています。その時私たちは、救いの衣と恵みの晴れ着をまとって、喜び躍るようになるからです。

「主が近い」と言えば、本日の福音で洗礼者ヨハネが登場しますが、洗礼者ヨハネの出来事を読む度に、この世の中にいるキリスト者としての私たちの「召命の証し」が感じられると思います。福音の言葉を借りると、洗礼者ヨハネはイエスについて「神から遣われた」人で「光について証しをするため、またすべての人が彼らによって信じるようになるため」来られた方、と教えています。

災害で停電になり、真っ暗な夜を過ごした人たちが大勢います。そんな時、ろうそくの小さい明かりでも、周りを明るく照らす光がどれほど私たちを安心させてくれたことでしょうか。どれほど心を暖めてくれるか、皆さんよく御存じです。イエス様は「まことの光」をもって私たちの人生がいくら暗くても私たちを照らしてくださる方です。私たちの、騒がし過ぎる世界において、どのようにイエスは今日の人々の「光」と なり得るのか、考えてみましょう。そして、私たちはこの「良い知らせ」また「喜び」について宣教せずにはいられないと思います。

